



蒋莉沙  
イラスト  
三笠舞子

# 真昼の騎士

ナイト

真昼の騎士

ナイト

*Knights*

# 目次

悪魔	大虐殺	変貌	肉布団	妖宴	崩壊した花弁	慟哭	無垢	バージン	初恋	阿鼻叫喚	血の惨劇	青空の下
54	48	31	27	25	22	19	17	13	11	9	5	4

紺碧の大空	空襲	敵地	地獄変	敬礼	反転	叫喚	乱行
120	114	109	99	89	85	68	60



## 青空の下

国と国が戦争をしている……

明日香<sup>あすか</sup>は地方の高校へ通っていた……高校へ行っても授業など受けるわけではない。体育館や各教室に設けられた臨時の武器製造ラインで手榴弾の製造を生徒全員で朝から晩まで作り続けるのが日課だ。お昼休みの屋上で紺のセーラー服を着た明日香<sup>あすか</sup>と弥生<sup>やよい</sup>は二人きりで、お昼ご飯を食べていた。清々<sup>すがすが</sup>しい晴天の秋空の下、二人の少女は取留めのない話に興じていた。

紺のプリーツスカートが風にはためき、薄水色のスカarfが靡<sup>なび</sup>いている。昼下りの憩<sup>いじ</sup>いの一時だった。突如、静けさを破り警報のサイレンが鳴った……



## 血の惨劇

けたたましくサイレンの音が校舎に響き渡る。雲一つない紺碧の青空、屋上で談笑していた明日香と弥生は驚き立ち上がる。何が起きたのか二人は周囲をキョロキョロと見渡す。

延々と鳴り続けるサイレン……しかし、周囲は整然としていて変化は感じられない。

しばらくして遥か遠方の山麓の辺りに夥しい数の白い翳りが雪のように舞い降り始める。碧を背景にして日光に反射してキラキラと白銀に煌めく無数の結晶が美しく映える。弥生が屋上の手摺りから身を乗り出して感嘆する。

「綺麗……あれは何だろ、明日香……」

明日香の足はブルブル震えている。

「あれはパラシュートだよ、敵軍の兵隊が降下してる……凄い数……戦闘が始まる！」

「あわわ……明日香、早く教室へ戻ろう！」

突然、体育館前方で大爆発が起こり地面が激しく揺らいだ。明日香と弥生は屋上の手摺りにしがみつく。激しい黒煙が碧空に舞い上がる……体育館の周辺では更に連鎖して爆発が続

く。

「体育館で武器造ってるの狙われたんだ、校舎も危ない……弥生、動いちゃだめ！」

「なんで？　ここだって軍事ヘリに狙われるよ、みんなのいる教室へ行こうよ」

「敵軍は軍事施設として学校に奇襲をかけてきた……もう校舎なんて先発隊に囲まれてるよ！」

「そんな……私達は民間人なのに攻撃されるの？　協定違反だよ……」

「敵は民間施設には空爆や空襲はしないって全世界に公言してるけど……軍事施設は攻撃の的だよ、ここは仮にも軍需工場よ！　危険だわ！」

暫くして校舎の彼方あちこちから激しい銃撃と生徒の叫び声が聞こえてくる……

「非道ひどすぎる……みんな殺されてる、私達は軍人じゃないよ……普通の高校生だよ、それなのに……」

「敵兵から見れば、ここは軍事施設でしかないわ……学校は隠れ蓑で軍隊が潜ひそんでるからつて大義名分なのよ！」

「そんなあ……皆殺しにされるの？」

「戦争だから……　おそろく……　さつきから凄い銃撃が続いてる……」

「そんなの、ヤだよ……この学校にいるのは女生徒が大半だよ……男子なんて召集されて

僅かしか残っていないのに……なんで殺されなきゃいけないのよ！」

明日香は、ハッとして弥生の口を塞ぐ……

「……ム……ムガ……」

「駄目、大声でしたら……下の敵兵に気づかれちゃう……」

「……アウアウ……アウアウ……」

「まだ銃撃が続いてる……敵兵がいなくなるまで、此处で温和おとよしく待っていていよう、弥生……」

「アウアウ……アウアウ……アウアウ……」

明日香は急いで屋上ドアのカギを外から掛けた。爆音がする。明日香は空を見上げる……澄みきった青空に無数の黒い斑紋はんもんが拡がっていた。ぶるぶる震えながら弥生が明日香に尋ねる

「明日香、あれは何なの？」

明日香は放心しながら応えた。

「あれは軍事ヘリだよ、物凄い大群よ！」

「軍事ヘリって……敵なの、味方なの？」

「そんなの近くに來ないとワカンナイよ！」



「敵の武装ヘリとかだつたら屋上にいても狙い撃ちされちゃう……明日香……」

真つ青な青空に飛び交う見慣れないヘリの大群……制空権は完全に敵軍に握られているようだった……自軍の勝ち目は既がない……弥生の顔は真つ青になりガタガタ震えている……。

「アウアウ、私達、此処にいても殺されるよ」

明日香は弥生を強く抱き締めた。

「弥生、私がついてるから落ち着いて……」

弥生は顔面蒼白おびになって恐怖に脅おびえている。



## 阿鼻叫喚

明日香は弥生を抱き締めながら、しっかりと口調で言い切った。

「弥生、私は何が起きても必ず弥生を守る！だから心配しないで……」

そう言いながら明日香は弥生の体を更に強く抱き締める。

「……ありがとう……明日香……」

弥生も必死に明日香に抱き付いてくるのだった。すると、極度の緊張による弥生の小刻みな震えが明日香の全身に伝わってきた。明日香も弥生の恐怖感の重圧に押し潰されそうな感覚に襲われる……弥生のふつくらした肢体を抱きしめていると彼女の大きく豊満なバストから伝わってくる心臓の激しい鼓動に明日香自身が同調してしまう。

校舎全体から響いてくる女生徒の悲鳴と小銃の乱射音に冷静でいらられるわけがない。屋上から校庭を覗くと……日常的な生活空間の中で暮らしてきた同胞の命が、あっけなく消滅していく現実があった。中庭で逃げ惑う女子生徒の背中が蜂の巣になる様を観て目を覆った。

グラウンドに避難していた体操着姿の少女の頭部が一瞬にして砕け散るのを明日香は直視した。狙い撃ちされた血塗れの屍がグラウンドのあちこちに横たわっている。教室にいたクラスメートは悉く血の海に沈んでいるに違いない。硝煙と血生臭い匂いがごちゃ混ぜになり

立ち上つて来て噎せ返る……。

校舎の彼方此方に赤色の滲みが霧吹で染め上げられた様に校庭を汚していた。学校の日常風景が戦慄の悍ましい地獄絵図に塗り替えられる。外階段では男性教師が女子生徒を庇って果てている姿があつた。

明日香は涙を堪えることができない。そして涙と共に激しくこみ上げてくる吐瀉物を我慢できず狼狽する弥生を突き放して激しく吐いた。吐けども吐けども嘔吐が止まらない、四つん這いになって醜態をさらす明日香。

しかし、そんな明日香のおしりに弥生は必死にしがみつき助けを乞うのだった。



## 初恋

今日、明日香が屋上にいるのは弥生が相談を明日香に持ちかけた為だった。やっと恋愛が実りかけた同級生の彼が最前線に派遣されてしまったことで弥生はストレスで疲れきっていた。彼と付き合っていた頃の弥生は、とてもスリムで痩身だった。バストやヒップの形も美しく、括れたモデル体型はクラスメートから持て囃されてもいた。しかし急遽、出兵に駆り出された彼とは契ることも適わず、別れのキスを一度したきりだった。

実は、彼の出兵前夜に……弥生は求められたにも関わらず、彼からの求愛を断ってしまったことを悔いていたのだ。弥生は軽く思われるのが嫌で断った……当然、彼が諦めずに求めてくれるはずだと信じていた。しかし、弥生に真剣な気持ちをはぐらかされ躲されてしまった彼に二の句はなく、弥生にせめてもの別れのキスをねだるのみ。弥生とキスを交わした彼は戦地へ出向した。弥生は処女を捨てる気でいたのに……。それからの弥生は、浅はかだった自分を責める毎日となり、心労の捌け口は食欲に化け、弥生は暴飲暴食に暮れる日々を過ごす。嘗て頬がこけ、痩せぎすの美人だった弥生は頬がふっくらして小太り体型となり可愛らしさが増してはいた……

しかし弥生は太ってしまった我身が彼に嫌われると懸念して必要以上に恐れ愚痴るばかり

だった。

明日香自身は小太りで可愛らしい今の弥生の方が魅力的に見えるのだが…。



## バージン

明日香は、お昼に屋上で弁当を食べながら弥生を慰めていた。明日香には弥生の悩みは贅沢にしか思えない。明日香には恋愛の相手もいなければデートをした経験もない……当然、明日香は処女のままだった。

中肉中背しか取り柄のない明日香にとって……弥生の相談事は苦痛でしかなく、弥生が憎らしかった。彼氏と逢えないから処女を捨てられないとか、肥ってしまったから嫌われるかもしれないといった贅沢な悩みにも、イライラしながら慰める明日香。実は弥生の彼氏こそ明日香にとって理想のタイプで片思いの相手だった。明日香にとって弥生は恋のライバルだったのだから……

明日香は胸の成長が遅く少年ばいルックスからか、女の子によくもてた。下級生の女子が集まって明日香のファンクラブが作られたほどだ。明日香の髪の毛はショートボブで、長く伸ばそうとすると明日香ファンの下級生から批判のメールが来た。

明日香は中学生の頃から、女子にはチャホヤされるが男子生徒には好かれることがなく欲求不満でいた。明日香の恋愛の対象は次第にアニメキャラや歴史上の人物といった非現実に移行していく、気が付けばBLに夢中になっていた。心の片隅で自らの性の危うさに怯える脆



さがくすぶる…。弥生は精神的混乱の中、明日香の腕の中で朦朧としている。

突然、正面にある別棟の校舎が大音響と共に爆発して跡形もなく崩壊した。弥生は激しく絶叫して、その場に崩れるように倒れ込み失神してしまふ…。その刹那、弥生の女々しさが明日香の禍々しい倒錯に動揺をもたらした。

明日香は敵に包囲され校内の生徒が虐殺されていく喧騒と日常空間の崩壊を目の当たりにして、遂には自我の抑制が効かなくなっていた。混乱状態の明日香は常軌を逸していた。明日香の激しい衝動は欲望を制御できず暴走を始める…。

明日香は弥生を抱き起こし、貪るように彼女の薄紅色に熟れた唇にキスをした。弥生は氣を失っていて反応がない。明日香は満足がいくまで一心不乱に接吻を続ける…。明日香の口内は、嘔吐した時の反吐の澀があったが、そのまま舌を差し込み弥生の口の中を舐めまわした。明日香にとって初めてのキスだった。初めてのキスは吐瀉物の苦い味がした。

弥生のポツテリした唇や頬の肉感が愛おしく感じられる。もはや明日香の自制心は消え失せていた。明日香は読み耽っていた小説の主人公に自身を重ね合わせ行動に移るのだった。

明日香は弥生の胸元の水色スカーフを取り外し胸元のホックを外すと彼女のセーラー服を脱がし始めた。スカート腰部のフォックを外しファスナーを下けると同時にプリーツスカートを筆取り取った。明日香は下着だけになった弥生を屋上の床に横たえる。